

学位請求論文審査報告書

氏名・（本籍地） 小淵 尊史（佐賀県）  
学位の種類 博士（仏教学）  
学位記の番号 甲第128号  
学位授与の日付 令和3年3月15日  
学位論文題目 『秘蔵宝鑰』の研究—構造と言語表現の視座から—  
論文審査委員 主査 大塚 伸夫  
副査 堀内 規之  
副査 佐々木 大樹  
副査 武内 孝善

論文の内容の要旨（1200字以上）

当該論文の執筆者である小淵尊史氏の提出した課程博士学位請求論文の主とする内容は、真言宗開祖の弘法大師空海（774～835）が天長七（830）年に時の天皇・淳和帝に奏上した勅撰書『秘蔵宝鑰』三巻に対して、仏教学・中国古典文学・日本古典文学といった三分野を総合した学際的研究と評せるもので、『秘蔵宝鑰』をめぐる空海の制作手法や同著作の存在意義を究明することによって、従来の先行研究における未解決問題に関して、新たな見解を提示する内容となっている。

当該論文のテーマとなる、空海の著作『秘蔵宝鑰』三巻は、『十住心論』十巻と共に天長七年に淳和天皇に奏上した、いわゆる「天長六本宗書」の一書として制作され、空海の創設した十住心思想の構造を文学的表現手法のもとに格調高く著され、真言密教の位置づけとその優位性を明示する著作として、空海教学を代表するものといえる。

まず序論において、筆者はかくも重要なテキストでありながら、『秘蔵宝鑰』が真言宗の伝統宗学において、また近年の先行研究においても、いまだ定説をみない幾つかの未解決問題を孕んでいることを指摘する。それは、

- ① 勅撰の宗義説明書として、他宗では一本のみの提出に対し、空海はなぜ『十住心論』とともに『秘蔵宝鑰』の二書を奏上したのか。
- ② 『十住心論』と『秘蔵宝鑰』の二書に与えられた役割の違いの本質は何か。
- ③ 『秘蔵宝鑰』巻中に、王法と仏法について議論される「十四問答」が挿入されるが、その「十四問答」挿入の意味は一体何か。
- ④ 『秘蔵宝鑰』第十秘密莊嚴心段の大部分が、『菩提心論』三摩地段の全文引用で占められる意味は何か。

等の四項である。序論では、上記のような従来の未解決問題を考察の出発点としながら、『秘蔵宝鑰』に見られる優れた比較思想体系と、中国・日本にわたる詩頌等の古典文学的表現とを融合させた空海の制作意図を究明するため、仏教思想と中国・日本の古典文学の三分野から課題解決に向けた文献学的アプローチを試みようとする。とくに『秘蔵宝鑰』中に見られる詩頌等の中国古典漢籍由来の文学的表現に関する考察には、儒教道教に関する漢籍にまで研究範囲を拡げ、従来の先行研究に類例を見ないほどの広範囲で緻密な研究作業を展開する態度が見受けられ、高く評価できる。

また研究の方法論としては、空海が嵯峨帝・淳和帝の治世下で、真言宗を開創弘宣する活動に邁進しながら、自らの教学の大成（十住心思想）を果たした段階で、真言教理の精髓を『秘蔵宝鑰』の中で

- |                    |               |
|--------------------|---------------|
| ㉓どのような説論形態で        | ㉔誰に対して        |
| ㉕具体的に如何なる手法を活用しながら | ㉖どのような語彙表現を以て |
| ㉗如何なる目的を達成する為に     | ㉘如何なる主題を絡めながら |

㊦どのような範囲に限定して

言語で表現したかの実態を、他の多くの空海著作を精査することは勿論のこと、その背景となる仏教経論から密教経論儀軌にいたる多くの仏教関連文献、さらには膨大な中国古典漢籍をも跋渉して、文献学的手法のもとに、その制作実態を実証的に明確化しようとする方法論をとる。これらの作業を通じ、空海教学全体で『秘蔵宝鑰』がどのような位置付けにあるのか、その存在理由と役割の明確化を本論文の目標に据えつつ、従来の未解決問題の解決に向けて論旨明快な自論を展開していく。とくに付言しておきたいことは、とすれば、多くの引用文を用いることで論文が長文化すると、論旨が不明瞭になりがちであるが、当該論文においてはそのような論旨の錯綜がなく、最後の結論まで、論旨が明快で終始一貫している。

当該論文の本論については、第1部『秘蔵宝鑰』の構造、第2部『秘蔵宝鑰』の修辞と言語表現、第3部『秘蔵宝鑰』の主題といった3部に分割され、全12章で構成される。

そのうち、第1部は三章で構成される—まず第1章では、『宝鑰』それ自体が作品として、複数の発話者が錯綜して多層的な言語表現を展開する特異な「語り」の位相を示すことに着目し、著者空海と『宝鑰』の「表現主体」概念（テキストの内部にて言説を生成する主動因）を区別する文学的視点を導入して、言説の主体の観点から『宝鑰』の全文を分析し、各部分の「語り手」が誰であるのかを指摘する。

第2章では、『宝鑰』の顔の見える読者（テキストの外側で言説を受容して読み解く評価認識の主体）を「天皇と文人官僚」と措定し、テキスト『宝鑰』がメッセージとして発信された対象である嵯峨帝・淳和帝ならびに側近官僚たちの活動の実際、および空海との交渉を論述する。極めて高度な漢詩文の素養を具備した彼らに向け、『宝鑰』が戦略的に執筆された背景を描く。

第3章では、『宝鑰』と『十住心論』を詳細に比較する（別添資料篇I参照）。両書記載の全要素を検証し、『十住心論』で具体的に記述されるところの、真言密教の奥秘の思想、深秘積や真言の功德、三密瑜伽行の具体的な行相が、『宝鑰』では一切言及されず、「越三昧耶（密教の奥秘を公にする過失）」に抵触しない範囲の記述に、空海が厳として限定し、『宝鑰』が九頭一密の浅略門を宣明する実態を指摘する。

次に、『宝鑰』の言語表現を考察する第2部は五章より成る—第4章では、「文」概念を、中国の古典的文章観との関わりで検証する。空海の『文鏡秘府論』所録の複数の文章論を鍵としつつ、真善美兼用の文采ある美文で各住心の教えを説く姿勢を確認する。具体的には、名教の基としての文章が、実際に空海の手によって如何に制作され、どのように言語として定着させたかを、空海の諸著作と『宝鑰』における多くの事例を用いて分析する。この分析の際には、一篇の詩文中の眼目となって、際立った輝きを発揮せしめる「秀句」という概念を導入して分析する。

第5章では、『宝鑰』に特徴的に見出される表現方法「対句」「詩頌」「問答」の手法について論じる。各手法の役割や中国古典での事例を踏まえ、空海の諸著作と『宝鑰』における各々の実態を網羅的に検証する。その作業を通じて、『宝鑰』が対句構造・対句的発想・駢儷体に類した文章リズムの上に構築された、典雅美麗かつ堅牢な言語表現の粹であり、読者の興味と便益を図る役割を果たす詩頌を効果的に使用して、読者に知的な刺激を与えながら論点を絞り込む問答体を援用した様相を明らかにする。

第6章では、『宝鑰』で空海が採用した比喻表現の一例に、第四住心冒頭の「燕石濫珠璞鼠名涉」を取り上げ、この淵源と、真偽分別・浅深差別の教判に直結する次第を述べて、一つの語彙・わずかな比喻で、論全体を一望させる、空海の言語表現上の卓越した妙技の例証とする。

第7章では、『宝鑰』に見出される老荘思想由来の語彙表現について論じ、『宝鑰』が読者の教養に適合する形で、老荘的な語句・概念をも包含する実際を指摘する。これは、外典（中国古典・漢籍）を典拠にする語彙表現を使用することで、『宝鑰』読者の理解を容易にするという、文意明確化の目的を達成させるための例証と指摘する。

第8章では、空海のテキストの語彙表現に、仏典とは別系統の流れとして、『文選』に代表される中国古典典籍・詩文が存在していることを明らかにする。さらに『宝鑰』中にも散見される『文選』関連の語句表現の多くの事例を例証して、『文選』影響の具体的な様態を実証する。そして、『文選』中に見出される故事・語彙表現を媒介として、空海＝表現主体と読者（天皇・文人官僚）との間に確実な意味の伝達（コミュニケーション）が保証される構図を指摘する。

次に『宝鑰』で説かれた主要主題を扱う第3部は、四章から構成される—第9章では、『宝鑰』冒頭で非常に強い印象を与える「生生死死」のテーマを取り上げ、「生死流転」が空海の著作で如何に扱われているか、また『宝鑰』全体としてどのように処理されるかを分析する。具体的には、『宝

鑰』の論述が進行するにつれ、生命の無常と死滅離別への痛哭を言表する表現が希薄化する。そして、人類普遍の「生死」に関する哲学的・宗教的課題の弘遠重大さを逆説的に表明し、真言教門が生死暗黒の恐怖から衆生を救うという空海の強い確信を『宝鑰』で表明するという論旨を展開する。

第10章では、『宝鑰』巻中に挿入された「十四問答」について、論理展開や対話者の思想的立場・行動原理など、登場人物に関する多角的な視点を導入して考察する。とくに問答中に登場する玄閑法師による教説の表面的な意義の奥底に、「仏法と王法」の隠密な関係が存することを明らかにする。そして「十四問答」の真の主題を、仏教の「鎮護国家」の効験と天皇の道徳的価値を述べるものと捉えて、「十四問答」を空海が天皇と文人官僚に向けた、道俗(仏教と国家天皇論)混融の教令テキストであるという解釈を導き出す。

第11章では、空海教学における『守護国経』の重要性を論じる。第九住心所説の「進金剛際」という密教世界への転換点に、『守護国経』の経文が引用される意図を究明する。それは、『十住心論』を含め、十住心思想の結節点に据えられる当該經典の教学の形成上、および国家体制内の真言宗存立基盤(鎮護国家の修法・三業度人制の金剛頂業必須の經典)の両面での意味合い、ことに国体護持という密教の公的役割において顕わになる最重要の性格を考察する。

第12章では、『宝鑰』最大の主題「心」に焦点を当て、空海の十住心思想の教理的基盤を明確化する。『宝鑰』では、能求菩提心・所求菩提心・十段階の住心・自心の仏など、多層的な意味を一つの「心」に包含させる。それを論理的に可能にするのが「仏のさとりを目指す心の旅」というモチーフ・動因(菩提を心に求め、仏境界に心地を勝進させてゆく過程)である。『宝鑰』を有機的構造体に仕立て上げる「心の探求」を、とくに「自心の仏」「心を開く曼荼羅」の観点から検討して、『宝鑰』の到達点を測定する。それは、第十秘密莊嚴心なる秘密宝蔵へと到達する旅の終わりは、自心の曼荼羅を開いてそこで如実に仏の姿を見るという旅程表として記述されるが、しかし実際はその金胎両部曼荼羅に渉入する具体的な実践方法は明かさないという、真言浅略門の秘密の制限に逢着することを強調する。

最後に、これら全十二章にわたる論述を総括して、筆者は以下のように結論を導き出していく。

『秘蔵宝鑰』とは、⑤(読者)漢詩文の教養を誇る天皇や文人官僚の為に、⑧(範囲)密教の奥義の部分の隠し通したまま、⑥(目的)真言密教の優位性を述べ、かつ国家における仏教の必要性を思想的に論証する

そうした著作であり、読者の理解と共感を得るために

⑦(手法)対句と漢籍由来の故事・語句を駆使した秀句(美文)と、⑨(説論形態)詩頌・問答・比喻などの文学的手法の形態を用い、⑩(語彙表現)経論の証文を巧みに盛り込んだ、自在な語り口の技巧を極めた文章表現を活用し

その結果、『宝鑰』が具有する主題など

①(主題)仏のさとりに向かって心が深化してゆく「旅路」と、⑥(目的)生死流転を離脱して悟りの彼岸に到達できる希望を読者の心に刻み込む効果をもった

そうした著作であったと論述する。すなわち、『秘蔵宝鑰』という著作は、真言密教の存在意義を宣揚する、勝れた伝法の書であったという結論を導き出す。

また、その洞察の結果は同時に、当該論文の出発点となった4項の未解決問題に対し、以下のような結論の解答を導くこととなった。

- ① 『十住心論』は密教の灌頂を受けたものへの奥義書、一方『宝鑰』は天皇や文人官僚向けに書かれた概説書という、読者対象の明確な違いが存すること
- ② 『十住心論』は密教の学理的基礎文献集の役割を有し、一方『宝鑰』は未灌頂者への密教の優位性を告げる案内の書という役割の違いが存すること
- ③ 「十四問答」は、国家における仏教の有用性を説く裏側に、国家(天皇)が仏教僧及び俗儒(官吏)に期待する行動規範を逆説的に提示した、統治原則の綱要の役割を果たすこと
- ④ 『菩提心論』の『宝鑰』への引用文は、真言門の瑜伽三摩地や観法・印明の具体を記載せずに、手際よく心の旅の主題に適合する浄菩提心追求の「心の探求」過程が簡略に述べられていることから、『宝鑰』で開示しようとする空海の考える秘密のレベルに即同するため、第十住心段に引用配置されたこと

という分析結果を導き出して、従来の『秘蔵宝鑰』をめぐる4項の未解決問題に対する見解を提示するといった問題解決型の体裁をもって、結論を導き出す内容となっている。なお、結論に至るまでの学際的に広範囲に及ぶ文献資料の扱い方や分析方法には、従来の宗学的研究手法には見られない独創的な方法論を用いていることを評価したい。

## 審査結果の要旨（1200字以上）

審査結果については、大正大学学位論文内規（研究対象と研究目的が明確であること、研究目的に応じた適切な研究方法が採用されていること、研究資料が適切であり分析や考察が適切であること、先行研究を的確に検討していること、論理と叙述に整合性と一貫性を有し形式や表記が適切であること、客観性と独創性を有し当該分野に大いに寄与する内容であること、将来にわたって継続的に発展可能な研究内容であること）に基づき、以下の項目に従って審査結果を述べたい。

- ① 体裁・構成
- ② 表記・論述形式・方法論
- ③ 学術的意義
- ④ 結論の妥当性
- ⑤ 口述試問の内容
- ⑥ 審査結果

### ①体裁・構成について

まず当該論文の体裁については、序論・本論（3部12章）・結論・附論・資料編（2部）の体裁となっている。分量については、序論・本論・結論・附論に相当する分量は、1頁40字×40行の体裁のもと、総頁数1,016頁にのぼる。これは400字詰め原稿用紙に換算すると約4,064枚の分量となる。また、論文付属の資料編は2部にわたり、併せて106頁の分量となって、当該論文に関する総分量は1,122頁を数える。課程博士論文としては、想定を超える分量である。

次に内容構成についてである。まず序論では、先行研究を精査して『秘蔵宝鑰』における未解決問題を4項に整理し、この未解決問題に対する新たな見解を提示するための研究方法論を見だし、本論執筆に向けての用意周到な準備がなされている。本論に関しては、3部構成で全12章を数えるが、いずれの章においても文献学的手法のもとに仏教学・中国古典（詩文関連典籍や儒教道教科典籍をも含む）・日本古典など、三分野に及ぶ文献を着実に扱い、各テキスト間の分析を通して空海教学や『秘蔵宝鑰』との関連性を考察しているため、導き出される各章の小結にも実証的な説得力がある。最後の結論では、各章において小結として提示した内容から飛躍することなく論理的に結論へと集約され、序論にて提起された未解決問題に答えを導き出そうとする内容にまで遡及するといった、問題解決型の論文体裁をとっている。まさに分量的にも内容的にも論文博士に匹敵する体裁と内容構成を備えていると言っても良い。

### ②表記・論述形式・方法論について

表記については、空海の古典文学の粋が盛り込まれている文献を扱う性格上、諸処に難解な語彙表現が見られるものの、その理解の便宜をはかる補足説明や現代語訳などを適宜挿入して、格調高い表記形態を維持している。また、文章的には適切な長さのセンテンスで、文章のねじれや主語述語の消失も見られない論旨明解な文章表記となっている。細かな点に目を移せば、大分量にもかかわらず変換ミスや誤字・脱字も殆ど見受けられない。次に論述形式においては、上記のような多種多様な資料から空海に関連思想となっている文献や文章を抽出しながら、空海の著作間との類同性を分析し、『秘蔵宝鑰』の文学的背景と共に、その全体像を明確化していく論述形式をとっているが、それらの複雑な作業の中でも、無理な論理の飛躍はなく、着実に分析、整理、まとめへと論理展開がなされている。方法論についても、仏教学のみならず、中国古典・日本古典に関する資料の扱い方や分析などの方法論は正確さが要求される場所であるが、当該論文においては巧みに文献操作して、各文献間の類同性や背景を指摘しており、第三者が見ても納得できる考察を行っている。とくに空海による文章論ともいえる『文鏡秘府論』と中国古典漢籍との関連性（第2部第4章）や、背景文献を詳細に指摘する箇所（第2部第7章、第8章など）では、難易度の高い文学的語彙表現を丁寧かつ正確に扱い（全引用文の書き下しと現代語訳つき）、自論を展開しているし、その他にも文学的な問題を扱う先行研究に対する不備を指摘するなど、今後、空海の文学的素養を研究する際には当該論文が有益になるといっても過言ではない。

### ③学術的意義について

当該論文の学術的意義について特筆すべき点は、第2部の五章全体にわたって使用した、中国・日本の両国にわたる古典文学作品に対する分析的・明解さである。当該論文の執筆者の所属は、仏教学とくに真言学を専攻する大学院生ゆえ、仏教学のうちの真言学が専門分野にもかかわらず、当該論文では繰り返すが、難解な中国・日本の古典文学作品に関する研究分析について、評価でき

る成果をあげた点である。研究対象とした『秘蔵宝鑰』そのものが古典文学の粋を集めた著作であったこと、また空海の文学的素養がずば抜けていたこと、それは中国の唐代においても、日本の平安時代初期の時代においても一級品ともいえる高いレベルにあったことは先行研究において明白な事実として賛美されてはいるものの、文章論ともいえる『文鏡秘府論』をもその研究範囲に含め、広く古典文学を扱い分析してみせたこと、なおかつ仏教教理を盛り込んだ詩文等を研究対象にして、文学的語彙表現から仏教・密教思想を読み解いてみせた研究者は僅少である。そうした空海の文学的表現作品を扱う先行研究が限られる中、十住心（九顯一密・九顯十密）思想といった純粋な真言教学も十二分に解釈した上で、空海の文学的素養を明らかにし得た成果は希少で、驚嘆に価する点を指摘しておきたい。

#### ④ 結論の妥当性について

本論における3部12章にわたって、『秘蔵宝鑰』そのものと、また同著作に関わる『十住心論』や『弁頭密二教論』以下の多くの空海による教学的著作、『文鏡秘府論』、『性霊集』の書簡類、開題類など、およそ空海の著作全般を研究対象にしつつ、『秘蔵宝鑰』の背景にある中国古典文学作品といった専門外の分野からも引用分析の検討を行い、上記要旨の結論を導き出している。端的に評すれば、手堅い結論を導き出したといえる。

ともすれば、これだけ幅広い文献を扱うことになると、各文献から得られる情報が過多となり、処理するのに錯綜して困難を窮めるものであるが、当該論文では資料情報を過大評価したり、与えられた情報以上の結論を導くといった誇張をすることなく、むしろ情報を慎重に扱い、資料から読み取れる範囲の中で最大限に導き出された結論であったと評することができる。まさに文献学に身を置く研究者として誠実に導き出した結論である。

ただ『秘蔵宝鑰』に限定したテーマ設定ゆえに、同著作の未解決問題をめぐる結論に限定された点があったいなかったと感じざるを得ない。扱った文献資料は、空海的全著作を網羅する内容であったし、中国古典文学等の資料にまで及んでいたため、もっと広い内容をもった結論を導き出せたようにも思える。その点が些か物足りなく残念ではあるが、課程博士学位請求論文として、これを契機に更なる研究の飛躍を期待するところである。

#### ⑤ 口述試問の内容について

口述試問の内容に関しては、大まかな概要について記述したい。まず、当該論文で扱われた先行研究に対する扱い方を問うものとして、先行研究を踏まえた結論は妥当なものであろうが、その結論を踏まえて、当該論文がどれほど先行研究より発展しているのかを明示すべきであったという指摘があった。これに対する執筆者の見解として、当該論文の論旨は基本的に先行研究から外れたものではなく、ごく限られた一部の資料しか扱っていなかった先行研究に対し、本論文では空海著作の全体を視野に入れて考察したものであったことなどが補足説明された。この後、空海の金胎両部の思想に対する見解や、『秘蔵宝鑰』の読み手（天皇や文人官僚）を意識した考察の中にも、南都の僧侶をも読み手の視野に入れた考察がほしかった点などの鋭い指摘があった。

次に、中国古典に関する論考について、『秘蔵宝鑰』を中心としながらも空海の他の著作を通して見た中国古典の影響を探る視点以外にも、逆に中国古典の視点から空海を捉えてみる論考を加えると、より充実した文学的背景が導き出せたのではないかとの指摘があった。その他、『十住心論』を広論、『秘蔵宝鑰』を略論とみなしてきた従来説への扱い方、両論提出のあり方などをめぐっての質疑があったが、執筆者としての見解は、両書には真言密教における秘密の部分めぐって制作し分けた空海の真意が背景にある点を強調するものであった。

次に、真言宗義に関わる質問として、『守護国経』をめぐる資料的問題が指摘された。執筆者は、おもに顕教の悟りの領域より真言密教の領域に転昇する際の証明文献として『守護国経』を重要視するが、「弾指」のキーワードをめぐっての直接的な文献は他にあるのではないかとの指摘であった。執筆者は「弾指」に関わる直接の影響があったのは『三摩地法』ではあるが、両経の経意には共通性があり、中でも『守護国経』における、釈尊が密教の観法オン字観を通じて密教の領域に転昇する文脈が空海の構想する第十秘密莊嚴心への転昇過程に合致する点を強調するものであった。

次に論点が、『十住心論』や『秘蔵宝鑰』を含めた諸著作が空海以降、どのように保管されていたであろうかという歴史的な難問題が提起された。この問題は、空海以降の真言宗以外の学匠たちが実際に空海の記事を引用している史実を意識しての質問であった。それゆえ空海以降、空海の著作がどのように保管され、そして他宗の学匠たちの目に触れることになったのかという歴史的な背景を問うものであった。この問題に関しては、古記録や新たな写本の発見を俟つより現状としては致し方ないとする質疑応答へと帰納したが、多くの示唆に富む見解とともに、執筆者にとって今後

の研究活動に及ぼす影響の大なる課題が披瀝されたことを付記したい。

また、論文中に記述された嵯峨帝・淳和帝と空海をめぐる人的交流に関して、両帝が空海をどのように見ていたのかという人間関係に及ぶ質問が提起され、空海をめぐる弘仁期の嵯峨帝と天長期の淳和帝との人的交流には、中国の文化事情に通じた入唐僧としての空海と、密教相承の阿闍梨としての空海といった差異があり、淳和帝との関わりをさらに究明すべき点が確認されるといった質疑応答がなされた。その他にも、『文鏡秘府論』と『文筆眼心抄』の相互関係、その両書と『十住心論』『秘藏宝鑰』との関係性、また近年注目されてきた藤原三守との人的交流をめぐる質疑応答がなされた。

以上の内容が口述試問における大まかな概要であるが、いずれも『秘藏宝鑰』という著作の底流に介在する不明瞭な領域に踏み込んだ諸問題に関する質疑応答があり、執筆者にとって、今後の研究活動に有益な多くの示唆を得たものであったといえる。

#### ⑥ 審査結果について

上記の口述試問を受け審議に入った。審査結果として、大正大学学位論文内規に基づき検証した結果、当該論文は、多くの文献を扱いながら学際的に研究対象に取り組み、難解な資料をも巧みに整理して、執筆者なりの論旨明快で妥当な結論が導き出されている点、口述試問における応答もうまく対応できた点で審査員の同意がなされた。ただしそれは、当該論文の主張すべてを是とするものではなく、口述試問で指摘されたようなより深い歴史的観点や広範囲に及ぶ洞察が望まれる点があったことを含めても、課程博士の学位請求論文としては十分である旨が同意されたのであった。

以上、予備審査から本審査に至る過程を踏まえ、とくに本審査に関わっていただいた堀内規之先生（副査・大正大学）、佐々木大樹先生（副査・大正大学）、武内孝善先生（副査・高野山大学名誉教授）、および大塚伸夫（主査・大正大学）の4名総意のもと、当該論文が課程博士論文と認定するに相応しいことを報告するものである。

以上

#### 公表予定

日程	令和 年 月 日
公表形態	① 掲載誌名：【 】【 】号・巻 【 】頁 【全文・要約】
	② 単著（発行者）
題目	<※タイトルを変更した場合>